



全国棚田(千枚田)連絡協議会

棚田ライタス

第32号 2003.12.20
(季刊・年4回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集／ふるきやらネットワーク

〒169-0073 東京都新宿区百人町1-23-29-202

TEL 03-5389-9937 / FAX 03-5389-0078

<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>



第9回全国棚田(千枚田)サミット・坂折棚田で水路の説明をする地元農家

棚田から嘆きが聞こえる

佐賀県相知町長

大草秀幸

佐賀県・相知町の蕨野の棚田。恵那市の坂折の棚田からバトンを受けて来年の第10回全国棚田サミットをこの地で開催させていただく。うれしい。幾度となく足を運んだ壮大な石積みの棚田だが、そのたびに風景が新しい。農家の人たちと言葉を交わす。

「また美味しい棚田米のとれたね」「そいばってん、ことしは収量の減った。一粒も無駄にはできんよ」

江戸庶民の暮らしや生活文化、環境、エネルギー問題まで幅広い視点で多くの作品を著している作家石川英輔さんが、何かのフォーラムの講演で次のように語っておられたのが新聞に紹介されていた。

「江戸時代の農民は、凶作などで米が食べられなかったと教わったが、当時は年に1人米1石、約150キロがあれば生きていけた。幕末ごろの人口は3100万人で、そのころ約3300万石の米が取れたから実際にはそうひどくなかったと思う」

さらに「今、日本では年間約720万トンもの食べ物が捨てられているという。残飯は金額にして約1兆1000億円との文部科学省の試算もある。農水産物の生産量は12兆4000億円だから、国産の食料をそっくり捨てているのと同じだ」

毎日毎日、気の遠くなるような量の食料が捨てられているに違いないと想像はしていたが、こうして数字を突きつけられると、ひどく衝撃を覚えた。コンビニやデパ地下の賞味期限切れの弁当や惣菜、給食やパーティー料理の残り。にもかかわらずおびただしい量の食料を外国からの輸入に依存しているニッポン。食糧自給率40%。この矛盾を考えただけで食料・農業への思いが萎えていくのを禁じえない。

2004年棚田サミットでは「棚田から嘆きが聞こえる～ニッポンの農業と食料」を考えてみましょうか。



第9回全国棚田（千枚田）サミットは、中山道で有名な岐阜県恵那市で開催された。中心市街地は宿場町大井宿として発展したところで、歴史情緒漂う会場でもあった。中心会場となった恵那文化センターの外もさまざまな趣向で、心からのもてなしを受けた



特集

第9回 全国棚田(千枚田) サミット

2003.9.5(金)~6(土)

レポート

恵那文化センターのステージでは、1日目の開会式にはじまり、九重野地区担い手育成推進協議会長 後藤生也さんの基調講演、2日の地元小学生・高校生事例発表、棚田環境大学の活動報告、分科会の発表等が行われた



地元のお母さん方がお茶を用意してくれ、恵那文化センターに入していく参加者と交流



会場の外に立派な石積みが再現されていた。坂折棚田の石積みの特徴である「清水口」（わき水の取り入れ口）などが再現され、まるで庭園のような趣きで仕上げてあり、美しい石積みの魅力を存分に味わえた



会場で出迎えてくれたのは、恵那東中学校ボランティア、恵那西中学校ボランティアのみなさんだった。彼女たちは、お茶の接待のほか、入り口に立ち「いらっしゃいませ」と元気な笑顔で迎え、参加者のごろを和ませてくれた

さる9月5日（金）～6日（土）、岐阜県恵那市において第9回全国棚田（千枚田）サミットが開催された。テーマは「棚田とともに生きるふるさと－整備と保全－」。棚田を保全するエリア、整備するエリアなど4つに分けて整備を行った恵那市坂折棚田。こうした経緯をもつ恵那市ならではのテーマとなつた。今年のサミットも全国から約900人の人が集まり、会場は活気に満ちていた。



「棚田とともに生きるふるさと—整備と保全—」
をテーマに全国から900人が参加!!

おいて集落全体で地域活性化に取り組む九重野地区担い手育成推進協議会長、後藤生也氏による基調講演「山間地域の水田営農確立を目指して」が行われた。

それを皮切りに、午後は6つの分科会を6会場で開催。この分科会は第8回全国棚田サミット（千葉県鴨川市）で行われた10分科会での議論と意思を引き継ぐもので、どの会場においても活発な議論がなされ、参加者たちの声で賑わった。

また会場は、恵那市のみなさんのもてなしの心であふれ、地元の婦人会の女性たちだけでなく、中学生たちも会場入り口に立ち、元気な声で出迎えてくれた。

大草秀幸氏から、佐賀県で49市町村中25市町村が、棚田の保全と活用を目的にネットワークを発足させ、県



私は、高知県梼原町で第1回全国棚田サミットが開かれた年を「棚田ルネッサンス」の年と呼んでいる。それは、これを機にして棚田が社会において認知され、一般的の都市住民を含む多くの人々が棚田に関心を寄せるようになつたからである。したがつてサミットが果たした役割は大きく、さらにそれが継続されることにより、棚田百選の認定、棚田学会の誕生、中山間地域等直接支払制度の実施などを実現させるのに一翼を担つたと考えている。

第9回全国棚田(千枚田)サミットを終えて

早稻田大学教授 中島 峰広

の学生たちとの交流を始めており、棚田オーナー制度立ち上げの胎動がみられる。後者については、第3回サミットの基調講演者今村奈良臣氏が述べた「全国から集まっている人たちがそれぞれの地域の取り組みを語り合い、情報交換をしてこそサミットを開く意義がある」という主張を受け、新潟県安塚町で開かれた第4回サミットでは3つの分科会が設けられ、交流に対する配慮がなされるようになった。それが、より広範に組織的になったのが千葉県鴨川市の第8回サミットである。

ここでは、地域づくり・オーナー制度・生物多様性・圃場整備・米の流通・ボランティア活動と棚田などのテーマで10の分科会が設けられ、大勢の人が議論に加わり、若い世代の大学生も環境大学を組織して参加した。このような取り組みは、恵那市の第9回サミットでも踏襲され、6つの分科会が設けられて同じように盛んな情報交換が行われ、新しいメンバーを加えた環境大学の活動も継続された。その意味では、第9回全国棚田サミットは期待される内容を備えたものであつたといえる。

今後は、より充実したサミットにするために、参加者と地元農民が積極的な交流を図る方法や棚田保全のための諸施策について具体的な提言が行えるような総会のあり方などを検討する必要があるであろう。

分科会1

伝統的文化景観としての棚田

当たり前の景観が崩れてきた
いま、新たな価値を棚田に！

分科会1では、京都大学教授・金田章裕氏をコーディネーターに、棚田を伝統的文化景観という新たな視点で見つめなさうと議論が進められた。恵那市坂折の棚田、また中国雲南省の棚田の事例を2人の話題提供者が紹介し、それを踏まえながら議論がなされた。

そこから棚田は、地域の環境に適応したものであり、土地から最大の利益を得るために、最大の労力を投下した日本の農業の極限であることが提言された。そして近代化のなか、価値観の変化によつて、棚田の景観が当たり前のものではなくなり、いま新しい価値を必要としていることまとめられた。それこそが伝統的文化景観の視点であると提示した分科会となつた。

安藤利道氏は坂折棚田の地元研究者で、多様な視点からの報告である。驚いた

ことに私が調査した棚田とほとんど共通していた。西日本の石積棚田は、構造や技術に共通の文化基盤があると確信した。

安達真平氏は雲南の棚田の報告だつた。

私が見た雲南の農地は、平地は水田、山地は畑か焼畑だけだった。イ族の見事な棚田を知り、雲南の広さと少数民族の文化の多様性を思った。畦での野菜栽培と水田での養魚は、日本では見られなくなっている。苦労の多い棚田を嫌がる若耆氣質は、今の日本と同じで面白かった。

本中眞氏の文化的景観の話は、私の知らないかった情報である。エコツーリズムが足踏みする今、棚田を中心としたフィールドツーリズムに可能性を感じた。秋の博物館学の講義で、さつそく学生に話した。

石田三示氏は千葉県・大山千枚田の報告で、粘土質のため天水で稻作が可能だという。雲南だけでなく、日本も広く多様なのである。

最後は金田章裕氏の総括だつた。坂折棚田での保全と活用の実例からまとめて、久しぶりに棚田について考えた私にも理解できた。分科会後の体育館での懇親会、バスを連ねての現地見学など、民官学協業の熱気におされながらの2日間だった。

(愛知大学教授 印南敏秀)

分科会レポート

5日(金)
15:00

コーディネーター：早稲田大学教授

話題提供者：酒谷グリーンツーリズム協議会会長

第2分科会
オーナー制度による棚田保全と地域活性化



分科会2 オーナー制度による棚田の保全と地域活性化

オーナー制度による棚田の保全と地域活性化

全国52ヶ所で

棚田オーナー制度が実施

分科会2では、オーナー制度がテーマ。コーディネーターの中島峰広氏は、全国52ヶ所において、棚田オーナー制度が実施されていることを紹介。都市住民との交流で、地域が元気になったことを評価しながら、地元における担い手確保の問題が取り上げられた。また全国棚田サミットで発足した「棚田環境大学」の学生からは、「都市住民だけでなく、学生にも目を向けてほしい」という声も出た。

しかし、今後は各地でのいろいろな取り組みを想定した上で、少しでも多くのオーナー確保のために、九大短期留学生の参加や地元開催の車イスマラソンに参加する関係者などいろいろな方面にPRし、多くのオーナーと触れ合いながら、地元特産の米や畜産物等の販売拡大等も含めて、努力していくことを思っています。

また、来年度は佐賀県の相知町での開催のため、少しでも多くの会員や地元の農家の人たちと、中山間地の棚田で「ごめづくり」をがんばっている人たちと交流を持ちたいと思っています。(佐賀県西有田町岳信太郎棚田会 事務局 池田勝幸)

今回の開催地は、岐阜県恵那市であり、会の仲間4名で参加させていただきました。昨年は参加ができず、2年ぶりに参加して、少しだけ感想を述べさせていただきます。

今回参加した分科会「オーナー制度による棚田の保全と地域活性化」では、コ

ーディネーターの中島峰広先生が進行役

で、棚田保全の活発な取り組みとしてオーナー制度を、細部に区分けをした全国各地の現状を踏まえて報告され、改めて、各地でいろいろな形でオーナー制度等が繰り広げられていると感じました。

今回話題提供者であった、宮崎の日南市、日高氏は、地区一帯で棚田オーナー

制度に取り組んでおり、集落の活性化にはとりわけ目を見張る思いがしました。私たちも平成9年から直接体験型のオーナー制度を、棚田米販売拡張を狙いとして立ち上げていますが、各地から参加があり、一定の効果はあつたと思います。

分科会3 棚田米の「魅力」—多様な需要とマーケティング



吉田俊幸さん
幅田晨文さん

参加者から声

棚田米に関する分科会は昨年から始まり、私は今回2回目の参加となりました。テーマは〈棚田米の「魅力」—多様な需要とマーケティング〉というので、コーディネーターは昨年同様、高崎経済大学教授吉田俊幸先生、スピーカーは大阪の米屋さん幅田晨文氏でした。

幅田氏は岡山県中央町の棚田米を15年にわたり販売し続けてきたお米屋さんであり、消費者参加の田植えや稻刈りツアーなど産地との取り組みについて、苦労話や暖かい交流の事例を丁寧に語られました。各地の棚田米試食の試みもあり、参加者は自慢のお米の味を真剣に評価していました。どの産地も標準以上のレベルの食味であったという印象でした。

参加者の中で力強い事例報告があったのは、来年のサミット開催地である佐賀県相知町でした。相知の棚田米「蕨野」は、センスが良くて人脈も豊富な町長のトップレベルにより、デパートや消費者直売でかなり評価を得ていているところで、価格設定も生産者が満足できるレベルにあるとのことでした。

吉田先生も指摘されるように、トレースができ、希少価値があり、おいしい棚田米は来年4月に施行される改正食糧法の中でも生かし方やPRの仕方、販路の開拓など、売れる米づくりについて話し合われた。そして「棚田米認定シール」といった新しいアイデアも出てきた。棚田保全への応援として、米の値段にプラスしても良いのではと提案がなされた。

試食をしながら棚田米の魅力と可能性を探った

分科会3は、棚田米がテーマ。話題提供者から岡山県中央町の棚田米販売の事例が紹介。それとともに、恵那市坂折の生かし方やPRの仕方、販路の開拓などの棚田米をはじめ、高知県梼原町の神在居の棚田米など8ヶ所の棚田米の食べ比べからはじまつた。そこから棚田米の個性の生かし方やPRの仕方、販路の開拓など、売れる米づくりについて話し合われた。

そして「棚田米認定シール」といった新しいアイデアも出てきた。棚田保全への応援として、米の値段にプラスしても良いのではと提案がなされた。

分科会4 生物多様性と棚田

棚田にはどんな生き物がいるのか？

田んぼの周りにいる生き物を食べてきたわたしたち。分科会4ではそれが、実感できなかったという印象でした。

参加者からも身近な生き物との経験が多く語られ、会場は賑わい、改めて棚田の生物多様性が確認された。

この分科会では2つの事例発表と総合討論が行われた。事例①では、柿野亘さんによる「谷津に生息する生物」と題して、栃木県・小見川流域の谷津に生息する魚類、両生類、貝類などの調査をもとに、生物の構成種や生息数には谷津ごとの微妙な環境の違いが大きく影響することが報告された。

さらに、棚田の生物多様維持には、多様な生息環境の保全が重要であることが強調された。事例②では、長瀬敏郎・山口鉢一・河合和幸さんによる「棚田の生物保全」と題して、恵那市沖之洞地区的水田整備事業にともなう沢尻川のグンジボタルを中心と

する動植物の移植とその後の経過が報告された。この試みから、ある地域の動植物を新しい所に移植するには、たいへんな労力を要し、しかも、それらが定着するには長い年月がかかることが強調された。総合討論は「棚田からこんなものを採って食べた」というテーマで、多くの出席者から田んぼや水路、畦畔、里山などから採れる食べ物が多数紹介された。それらはフキノトウ、コゴミ、ウド、ワラビ、サギソウ、カタクリ、シジミ、タニシ、ドジョウ、サワガニ、クロスズメバチ、アカガエルなど枚挙に暇がない。「私はこんなものを食べた」と紹介する人たちは一様に、顔全体に笑みを湛え目は輝いて見えた。それはあたかも自然の恵みの中で生きる喜びの表情とも受け取れる。このような雰囲気の中で、私の心は少年の頃過ごした50年も昔の田舎での生活にタイムスリップした。初めてつなぎを捕まえた時の、獲物を獲た喜びと命を奪う戸惑いの複雑な心理、ナワシロイチゴやアキグミの味、トンボやホタルの大群が乱舞する空など。私たちも生物の一員で、自然を離れては生きて行けないのだ。あの田んぼの賑わいをもう一度取り戻したい。

そのためには継続的な米づくりが基本であることを改めて確認させられる分科会であった。（棚田学会 安井一臣）

生物多様性、難しそうな言葉ですがとても簡単な事で、私たちの身近にある生き物に目を向けることなどと実感した分科会でした。ですがとても簡単な事で、私たちの身近にある生き物に目を向けることなどと実感した分科会でした。谷津に生息する生き物調査とホタルの保護について話題提供があり、それを受けて

自分たちの住んでいた所にはどんな生き物がいるのか各地からの発表があり、何種類もの生き物が登場しました。この多样性が生物多様性なのです。しかし絶滅種などの問題、地球温暖化との関わりなど奥の深い問題ではあると思います。今後機会を捉え、少しでも多く学んでいきたいと思いました。

発言した年配の方たちは大変樂しそうに懐かしそうに話していく、羨ましく聞いていました。きっと子供の頃の豊富な体験を思い出していたのでしよう。「高度成長期以降の子供たちはそんな体験が少なく、これを掘り起こし記録し生かしていく必要がある。実体験として生き物を感じていかなければ、保全や保護が実現しないのではないか」と水谷先生は話されました。机上の空論では生物が大事だという実感がわかないでしょう。そしてそんな人たちが確かに多くなつて来ています。

私の属する大山千枚田保存会では自然観察会を開催していますが、身近な生き物を五感で感じるこの観察会が生物多様性を伝えていくものであり、意義ある活動であったと再認識し自信がつきました。多くの人に生き物と親しんでもらえるよう、今後も積極的に取り組んで行きたいと決意を新たにしました。



分科会5

棚田保全のための整備

保全すると、ころはどこか
整備すると、ころはどこか

木村和弘さん
杉山行男さん
柘植健治さん

ヨーディネーター：信州大学教授

話題提供者：綠資源公團農用地業務部次長

惠那市建設部建設課課長

参加者
からの
声

第9回棚田カーリングにねむね
会に参加しました。テー

私の属する大山千枚田保存会では自然観察会を開催していますが、身近な生き物を五感で感じるこの観察会が生物多様性を伝えていくきっかけとなり、意義ある活

だという実感がわかないでしよう。そしてそんな人たちが確かに多くなつて来ています。

ていく必要がある。実体験として生き物を感じていかなければ、保全や保護が実現しないのではないか」と水谷先生は話されました。以上の討論では生物が大事

体験を思い出していたのでしよう。「高度成長期以降の子どもたちはそんな体験が少なく、これを掘り起こし記録し生かし

たいと思いました。
発言した年配の方たちは大変楽しそうに懐かしそうに話していて、羨ましく聞いていました。きっと子供の頃の豊富な

種などの問題、地球温暖化との関わりなど奥の深い問題ではあると思います。今後機会を捉え、少しでも多く学んでいき

自分たちの住んでいた所にはどんな生き物がいるのか各地からの発表があり、何種類もの生き物が登場しました。この多様性が生物多様性なのです。しかし絶滅

にあり、「教育の場として活用したい」「多様な生物が生きる貴重な里山として棚田を守つてほしい」と、いろんな声が聞こえてきます。また、地元では「安全で生産性をあげ継続していくためのほ場整備を全体一致で進めていく事が大切」という考え方や、「活性化として朝市を通して生産者と都市住民（消費者）との関係作りを行い、その動きから里山全体を活性化の対象として公園をつくる構想につなげていく」考えなどが出てきています。

交流会は、毎年盛り上がりを増してきている。全国の棚田保全の同志との年に一度の交流は、情報交換だけにとどまらない。行政関係者だけでなく、農家など現場の人たちが訪れる全国棚田サミットは、互いの存在だけで互いの労をねぎらうことがでいる貴重な場だ。全国の仲間たちと交流し、元気を分け合うことで、棚田保全が活発化してきている。交流会で一同に会することで、全国でこれだけ多くの人が棚田保全にかかわり、力強い気運があることを誰もが感じただろう。



交流会で一同に

棚田への価値観の差が顕在化されたのでは
と思います。これから地域を担う若い人々
が、自分で未来を選択する機会を得ること
や、ほ場整備を通して対話が行われること
が、未来への重要な転換を作り出す予感が
します。技術も方法論も正解はまだない。
ただ、古来の人が自然と対峙し創造し、引
き継いできた里山はとても尊いものだと心
に刻んで、そして、それを受け継いだ全国
の棚田を持つ町が、これからいろんな回答
を出し、より良い方法を見出し、またこう

公民館 生涯學習専門員 蔭山 歩

· 仰木

分科会6

直接支払制度による中山間・棚田地域の再生



小田切徳美さん
後藤生也さん
後藤ツネ子さん
田村尚志さん
田本兼彦さん

コーディネーター：東京大学助教授

話題提供者：九重野地区担い手育成推進協議会会長

九重野地区担い手育成推進協議会

山口県山口農林事務所主査

恵那市笠置町西の洞集落副代表

参加者
から
か
声

分科会6では、中山間地域等直接支払制度について議論が行われた。コーディネーターの東京大学助教授・小田切徳美氏は、この制度が平成16年に見直しの制度であることから、この時期の議論は有意義と解説。話題提供者たちは事例をもとに、農地保全にとどまらず、集落の体力をつけることに貢献したと評価があつた。そして現在、「耕作放棄を止め、農地を維持する守りの制度から、直売やグリーンツーリズム、担い手育成など攻めの制度へ」と継続希望を踏まえて、制度の新しい方向性を打ち出した。

集落の体力をつけた 直接支払制度

分科会6では、中山間地域等直接支払制度について議論が行われた。コーディネーターの東京大学助教授・小田切徳美氏は、この制度が平成16年に見直しの制度であることから、この時期の議論は有意義と解説。話題提供者たちは事例をもとに、農地保全にとどまらず、集落の体力をつけることに貢献したと評価があつた。そして現在、「耕作放棄を止め、農地を維持する守りの制度から、直売やグリーンツーリズム、担い手育成など攻めの制度へ」と継続希望を踏まえて、制度の新しい方向性を打ち出した。

(徳島県徳島市・個人会員 村上六治)



2日目、恵那市立中野方小学校5年生による、坂折棚田の歴史から現代の棚田保全活動までをものがたりにした劇が、自作自演で披露された。小道具や衣装にもこだわり、舞台装置も丹精こめてつくられ、内容もよく伝わるとてもすばらしい劇であった。
そしてそのあとに、岐阜県恵那農業高等学校による棚田での実習活動や水質調査や生物調査など、調査研究の発表が行われた。この発表によって、地元の若者たちの活躍に大きな期待が寄せられた。
また、第8回全国棚田サミットで発足した「棚田環境大学'03」の坂折棚田での1年間に及ぶ活動が報告され、その熱心な活動は目を見張るものがあった。



2日目、恵那市立中野方小学校5年生による、坂折棚田の歴史から現代の棚田保全活動までをものがたりにした劇が、自作自演で披露された。小道具や衣装にもこだわり、舞台装置も丹精こめてつくられ、内容もよく伝わるとてもすばらしい劇であった。
そしてそのあとに、岐阜県恵那農業高等学校による棚田での実習活動や水質調査や生物調査など、調査研究の発表が行われた。この発表によって、地元の若者たちの活躍に大きな期待が寄せられた。
また、第8回全国棚田サミットで発足した「棚田環境大学'03」の坂折棚田での1年間に及ぶ活動が報告され、その熱心な活動は目を見張るものがあった。

子どもたちも発表

地元農家が解説者に

2日目、恵那市立中野方小学校5年生による、坂折棚田の歴史から現代の棚田保全活動までをものがたりにした劇が、

市内めぐりツアーが定番になっている。今回の市内めぐりでは、班ごとにボランティア解説者がついたにとどまらなかつた。棚田のなかの農道を歩くと、随所に地元農家が立ち、水路や水のとり方、暗渠の仕組み、石垣の説明など、農家自らが解説をしてくれた。これは、とても印象的だった。

これは坂折棚田の調査研究の成果があるとともに、こうした調査研究の結果を地元農家に還元し、共有し、それを地域の誇りへとしてきた地元の地道な努力の成果であろう。農家の方々の労を惜しまぬ見事な解説ぶりに参加者たちは感激し、坂折棚田への理解を深めた。

2004年第10回サミット開催地 佐賀県相知町から

日本の棚田百選に選定されている「蕨野」は、町の南部に位置する八幡岳(764m)の北斜面に拓かれています。棚田は、標高180mから420m付近にまで広がっており、その規模は約40ha、1050枚。大小の石一つひとつ積み上げて造成していった先人の並々ならぬ努力に、敬服するばかりです。

蕨野の棚田には、日本で一番高い8.5mの石垣があります。蕨野では、棚田の石積み作業は農民の手によるものが多く、石垣棟梁(現場指揮者)と作業を手伝う農民による共同作業で行われました。高さ8.5mの高石積みも、昭和元年から昭和10年にかけて手間講により造成されています。

蕨野の棚田保全の戦略は、米づくりを基軸としながら、棚田を舞台とした様々なイベントを仕掛け、都市住民との交流を活性化させることにあります。

米づくりでは、平成13年から地元で蕨野棚田保存会を結成し、佐賀県品種「夢しづく」の栽培を取り組みました。生活雑排水が入らず安全・安心であること、食味がよいこと、そして何よりも壮大な石積み棚田の風景美のイメージが結びつき、「蕨野」は収穫量全てが完売する人気ブランドとなっています。イベントでは、蕨野集落を含む平山地区(5集落)が中心となり実行委員会を組織し、ウォーキング大会や菜の花種まき交流会、菜の花ハイキング等、年間を通じた交流事業を展開しています。

さらに特筆すべきは、佐賀大学農学部と町が、蕨野棚田の耕作放棄地の利活用を柱

とする地域交流協定を締結していることです。同大学農学部では、学生・地元住民・市民からなる棚田援農隊、現代版の「手間講隊」を結成。棚田での耕作放棄地の復田、また有機・無農薬栽培の実験、子どもたちの環境教育の場として活用しています。住民・行政・大学の地域連携による棚田保全活動が進められているのです。

来年度は、この地で節目となる第10回目の棚田サミットが開催されます。人口9000人の小さな町ですので、大掛かりなことはできず、参加者のみなさまにも何かとご迷惑を掛けることもあるかと思いますが、ぜひ「ノーネクタイ」で肩の力を抜き、棚田の風景美を楽しみつつ、これまでの活動について振り返り、そして未来へ向けての展望を考える大会にしたいと思います。

(佐賀県相知町農林観光課 島松真祐)



2004年開催の佐賀県相知町のみなさんがステージでアピール。
ノーネクタイを呼びかけた

2004年第10回全国棚田サミットは佐賀県相知町で 2005年第11回全国棚田サミットは愛知県鳳来町で

米づくりでは、平成13年から地元で蕨野棚田保存会を結成し、佐賀県品種「夢しづく」の栽培を取り組みました。生活雑排水が入らず安全・安心であること、食味がよいこと、そして何よりも壮大な石積み棚田の風景美のイメージが結びつき、「蕨野」は収穫量全てが完売する人気ブランドとなっています。イベントでは、蕨野集落を含む平山地区(5集落)が中心となり実行委員会を組織し、ウォーキング大会や菜の花種まき交流会、菜の花ハイキング等、年間を通じた交流事業を展開しています。

さらに特筆すべきは、佐賀大学農学部と町が、蕨野棚田の耕作放棄地の利活用を柱

としている。実情を広く理解してもらうために「物言つ農民」にならなければなりません」と述べておきました。やはり、棚田の保全は、都市住民をはじめとする多くの国民の理解と協力が必要です。今回のサミットでも、参加された皆様の棚田に対する熱い思いを、幅広く全国に向

事務局 ニュース

事務局、千葉県鴨川市からのお知らせコーナーです。

けて発信することができたと思い

ます。少しずつではありますが、しかし、着実に棚田保全の重要性も認識されつつあります。

また、一日目の午後に行われた6つの分科会では、「伝統的文化景觀としての棚田」や「直接支払制度による中山間・棚田地域の再生」など様々なテーマで活発な意見交換が行われました。

今回、盛況だった分科会の一つに、「直接支払制度による中山間・棚田地域の再生」をテーマにしたものがされました。この直接支払制度は、平成12年からスタートし、平成16年で見直しがされる予定となっています。全国各地から交付金が多様に活用され、様々な成果が報告されると同時に、17年度以降も直接支払制度の継続・拡充を求める意見が相次ぎ、予定期間を30分も超える盛況ぶりでした。2日目には各分科会の討議内容が報告され、論点を基に6名のコーディネーターによるパネルディスカッションが行われました。参加された皆様もより理解が深まり、棚田が持つ多くの役割や価値を再認識できたのではないかでしょうか。

記念すべき第10回目のサミットは、佐賀県相知町蕨野(わづひの)棚田で開催されます。ぜひ、全国各地から参加していただきたいと思います。最後になりましたが、サミット開催にご尽力頂いた恵那市実行委員会の皆様、地元保存会の皆様、後援を頂いた関係団体各位に対しまして衷心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

事務局からのお願い

会費の納入が遅れている方がいらっしゃいます。お早めに納入下さいますよう改めてお願い申し上げます。

はさみちょう 長崎県波佐見町

取材・文: 石井里津子



鬼木の棚田は、町の南側に位置する虚空藏山系の裾野に広がっている。22ha約400枚。ここには3つの川

が流れ、その川の左右に棚田が拓かれている。川の水

をせきとめ、田んぼに引き込む短い

井手(水路)が随所にあつた。そこから水を引き入れ、

何枚かの田んぼへ田ごしで水を落とす。そしてまた、川から井手で水を引き込む。それが繰り返されていた。

鬼木の住民、かつ町役場農林課の前川芳徳さんがいう。

「棚田が荒れない三大原則といふのを熊本県水俣市『愛林館』の館長沢畠享さんがいっておられました。1つ、自分の米は自分でつくりたいという思い。2つ、自分が田んぼを荒らしたら、ほかの人に迷惑をかけるという思い。

3つ、自分の代では荒らせない。まるで山あいに突如拓かれた和みの空間だった。折り重なるよううにうねる山の起伏に沿って棚田が拓かれている。大地のやらかな曲線に優しく添うように拓かれた田んぼの連なりが美しかった。その静かな里山の空間は、すべての喧騒を忘れさせてくれる別天地のようにも感じられた。

起伏が織り成す里山の風景美

長崎県波佐見町。人口約1万5000人。ここはやきもの町として有名な町である。日用食器の全国シェア15%を占める磁器の産地だ。そして、日本の棚田百選に選ばれた鬼木の棚田がある。集落約70戸が取り組んでいる「鬼木棚田まつり」に元気があると聞いており、行かねばと思つていたところ、ようやく念願がかなつた。

加工所、そして鬼木棚田まつり

棚田の一角に建てられている鬼木加工センターをのぞいた。鬼木味噌などを中心に手づくり商品が人気である。女性2人が、

ヤーコンの皮を剥いていた。味噌漬けにするためという。ここは、

鬼木のお母さん4人が切り盛りしている。若い人で48歳。一番年上で70歳。世代が違う女性がうまくやるコツは?

「遠慮せずにいいたいことをいうこと」「人のいうことをあまり気にしないこと」続けざまに教えてくれた。

加工所を開いて11年目。スタ

ート時、給料も出なかつた時もあつたというが、いまでは東京のスーパーにも卸すほどだ。豆

菓子やかりんなど、地元の食材を使つてのあたたかみあるお菓子もおいしかつた。

加工所の向かいに農民具資料館が建つていて、町が建て、管理運営は鬼木郷自治会である。

「棚田が荒れない三大原則といふのを熊本県水俣市『愛林館』の館長沢畠享さんがいっておられました。1つ、自分の米は自分でつくりたいという思い。2つ、自分が田んぼを荒らしたら、ほかの人に迷惑をかけるという思い。

3つ、自分の代では荒らせない。まるで山あいに突如拓かれた和みの空間だった。折り重なるよううにうねる山の起伏に沿って棚田が拓かれている。大地のやらかな曲線に優しく添うように

一ムだ。

さらに力が入つていて、味噌漬けにするためという。ここは、

鬼木のお母さん4人が切り盛りしている。若い人で48歳。一番年上で70歳。世代が違う女性が

うまくやるコツは?

「遠慮せずにいいたいことをいうこと」「人のいうことをあまり気にしないこと」続けざまに教えてくれた。

加工所を開いて11年目。スタ

ート時、給料も出なかつた時もあつたというが、いまでは東京のスーパーにも卸すほどだ。豆

菓子やかりんなど、地元の食材を使つてのあたたかみあるお菓子もおいしかつた。

加工所の向かいに農民具資料館が建つていて、町が建て、管理運営は鬼木郷自治会である。

「棚田が荒れない三大原則といふのを熊本県水俣市『愛林館』の館長沢畠享さんがいっておられました。1つ、自分の米は自分でつくりたいという思い。2つ、自分が田んぼを荒らしたら、ほかの人に迷惑をかけるという思い。

3つ、自分の代では荒らせない。まるで山あいに突如拓かれた和みの空間だった。折り重なるよううにうねる山の起伏に沿って棚田が拓かれている。大地のやらかな曲線に優しく添うように

ものを数えられないほど展示収集していた。足ふみ脱穀機も何台もある。その脱穀機は、やけにやつやテカテカしていた。

「これも、体験で子どもたちが使つてますけんね」

田中さんは、道具を集めめて貸すだけでなく、自ら講師もできるスーパーが、田んぼの学校を開催し、子どもたちにしめ縄づくりを伝えていた。その夜の反省会に合流した。場が興じてくると、メソバーパーが、醤油の入つていて小皿をおしづりできれいに拭き取るうちに、軽快な波佐見節が唄われ、人々は小皿を片手に2枚ずつ計4枚をまるでカスタネットのように鳴らしながら、即興で踊りはじめた。地元に伝わる「皿おどり」である。気がつくと自分も手に皿を持ち、あれよあれよと、一緒に踊つていた。

波佐見は元気が良い。元気がはじけていた。皿おどりの軽快さが耳に残つた。そのノリの良さで、棚田保全も地域づくりも楽しんでいた印象があった。「アーチャントヤレー シャントヤレー」。波佐見節の軽快さで、それが波佐見の魅力なのである。

お宝おじいさん—田中さん

鬼木を離れて、町の中心地・宿郷に向かつた。そこに個人で民俗資料館をつくり、集めた道具を小学校に貸し出しながら、

体験活動を教える名物おじいさん、田中孝之さん(75歳)を訪ねた。

数年前まで、田中さんは農業を営むかたわら「生地屋」も手がけていた。「生地屋」とは、やきものの町ならではの産業だが、

こうしたやきものの下請け作業やきものの土から素地を成形する作業を請け負つていて。

鬼木の元気は、加工所だけではない。2003年の9月に4回目を終えた「鬼木棚田まつり」は面白さ満載である。たとえば、クイズを解きながら棚田のウォーカラリー。そして、稻刈り後の棚田を利用してのダーツ。棚田を上から見下ろして、連なる田中さんは、かつての作業場を利用し、資料館のよう古い農具や生活道具、さまざまなもので農業経営を支えてきた

地域でもあると聞いた。

「さが棚田ネットワーク」が誕生しました!

佐賀県には、全耕地面積が約47000haの約15%、700haの棚田があり、山の斜面や丘陵地に段々と折り重なった四季折々の景観の美しさは、佐賀の原風景の一つとして私たちの心に潤いと安らぎを与えています。また、さまざまな役割を持っています。

しかし、傾斜が強く農作業が大変な棚田は、農業の担い手の不足や高齢化が進み、近年では耕作放棄地も目立つようになりました。

そこで平成15年6月4日に「佐賀県の棚田を守つていこう」と棚田のある市町村などにより「さが棚田ネットワーク」が設立されました。現在、25市町村と佐賀県土地改良事業団体連合会、佐賀県で構成されています。

初年度となる2003年の活動は、「さが棚田ネットワーク」のホームページを10月に開設しました。各地域の特色ある棚田の紹介や各地のイベント情報のほか、四季のフоторギャラリー、「棚田クイズ」など、自分で楽しみながら、また、

遊びながら、佐賀の棚田のことを知ることができるホームページになりました。

HPアドレス
<http://www.pref.saga.jp/nourin/>

さらに、11月には福岡市天神イムズビルの「佐賀県福岡情報センター」において「佐賀の棚田展」を開催いたしました。佐賀の棚田写真や見どころ、イベント情報などをパネルで紹介したほか、各地域の棚田米や案山子などを

展示し、福岡の都市住民の人々に潤いとやすらぎの佐賀の棚田をPRしました。

「さが棚田ネットワーク」では、棚田の良さや大切さを多くの方々に知ってもらい、棚田保全の輪を広げるため、「棚田での田植え、稻刈りなどの体験やイベント情報などを発信し、佐賀県の棚田地域の活性化と棚田の保全を図っていきます。

(佐賀県農政部農村計画課 計画調整班 稲富恵子)

第9回・全国棚田(千枚田)サミットに参加して

去る9月、恵那市

で開かれた棚田サミットに参加した。関係

諸氏の並々ならぬ熱意

と会場の熱気、さらに、中学生までこのサミットも既に9回目になり、会場の熱気、さらに、中学生まで含めた地元の方々の暖かいもてなしは今でも熱く思い出す。

私は初めての参加であったが、

このサミットも既に9回目になり、回を重ねることに参加者の数も増え、議論もどんどん広がり深まっている

と聞いている。事実、今年の会議も基調講演、6つの分科会、盛大な交

流会、小学生による児童劇や高校生の事例発表、大学生の活動報告など、

一方、農産物の消費者という視点からこのサミットを見てみると、本農業が抱えている問題点をあげり出し、その解決に向けた多くのヒントを含んでいます。これからの改革に必要な施策の立案とその実行の原動力になることは間違いない。

一方、農産物の消費者といふても、できるだけ安く買いたいところからこのサミットを見つめることも重要である。形や色艶がよく、安全で安心できる食材を、欲しい時にいつでも、できるだけ安く買いたいといふ、一般消費者にとってはしづくまともな要求が、生産者にはとても多い無理難題で、長い目で見ればどちらだけいるだろうか。先の小泉首相の「農業鏡国」発言には、いかれほど国内外の農業の足腰を弱めているかという事に目を向けている人はどれだけいるだろうか。先の小泉

さかの心理的反発を禁じえないが、

食料自給率40%という現状にあっても、農産物自由化の拡大を急ぐの方針に変化はない。食料・農業・農村基本計画の前倒し的な見直しも急がれ

ている。農業の多面的機能という価値も、広く一般に理解されるまでにはまだ長い時間が必要であろう。このような現実を踏まえて、これからサミットの役割を考えると、「自觉的消費活動」を広める取り組みが最も重要な課題であるよう気がする。自覚的消費活動とは、生産現場の裏側も見て、環境への配慮に乏しく資源循環的な生産手段によらない農産物は、たとえその価格が安くても買わないというコンセンサスに基づく新しい消費様式を指している。

(棚田学会 安井一臣)

編集後記

わたし自身、全国棚田(千枚田)サミットに参加して7年目を迎えました。7年にもなると知り合いが増え、その人たちの元気で希望に満ちた顔を見ることだけでうれしくなります。「今年も案山子コンテストやるよ」という話題もあれば「今年父ちゃんがケガして、田んぼ休んだ」そんな話も。周りをきょろりと見ていると、いろんなところで話がはずんだり、名刺交換にとどまらず、半被の交換などもしているではありませんか。いいなあ、サミットというのには、「棚田保全や地域活性化」の志を一つにする全国の同志が集まる場なんだなあ。と痛感して帰ってきた次第です。都市住民の自分もそんな志をもつ1人であります。そうした志をもつ人たちの輪を広げていきたいと感じています。石井里津子

会員募集中

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織
全国棚田(千枚田)連絡協議会
 お申し込み・お問い合わせは協議会事務局
鴨川市農林水産課内

〒296-8601 千葉県鴨川市横瀬1450
 TEL:0470-93-7834 FAX:0470-93-7856
 協議会HP: <http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>